第五回

琉球古典音楽の会

創立25周年
記念公演

野村流古典音楽保存会関東支部

税務相談・代行業務

会計・記帳指導業務　税務調査立会業務

経営助言(MAS)業務　企業リスクマネージメント　監査・商事法務業務

経営計画作成指導(シュミレーション)業務

企業の発展に貢献する！

仲田会計事務所

〒104-0061　東京都中央区銀座2-6-16　銀二ビル3階
TEL 03(3563)0351㈹　FAX 03(3563)1780

所長税理士　仲　田　清　祐

㈱　銀座電子計算センター　代表取締役
日本経営者同友会　特別会員
那覇商業関東同窓会　会長
関東沖縄経営者協会　顧問
東京沖縄県人会　会長
財団法人沖縄協会　監事
藝能学会　監事
民族藝術交流財団　会員

株式会社　仲田経営センター

〒900-0033　沖縄県那覇市久米2-11-13　リヴァイブ(屋島組)本社ビル1階
TEL/FAX　098(867)0655

代表取締役　仲　田　清　祐

業務内容

経営コンサルタント業務・会社設立の相談業務・財務及び給与計算代行業務

第五回

琉球古典音楽の会

ご挨拶

野村流古典音楽保存会
関東支部長　久田 友昭

本日はご多忙のところを関東支部二十五周年記念公演にご来場くださいまして、誠にありがとうございます。野村流古典音楽保存会関東支部の発足は、昭和53年(1978年)3月12日でありました。それから9年目の昭和62年(1987年)6月23日に第一回琉球古典音楽の会を国立演芸場で会員数はわずか14名を率いて仲宗根善久支部長時に開催しました。

あれから早、25周年が経ち、現在会員数83名となり関東支部も徐々に充実して来ました。これもひとえに皆様方の暖かいご支援・ご協力のたまものと心から感謝申し上げます。

さて本日の第五回公演のうちプログラムの第一部の幕開けは、会員総出演の「御前風」三曲でこれに男女打ち込みの祝儀舞踊(かぎやで風節)を添えてお送りします。

つづいて本調子独唱、伊野波節、二揚独唱、5曲をご鑑賞いただきます。伊野波節は揚げも高く長く、低音も低く太く歌うので声の鍛錬には格好のものです。二揚5曲は独唱曲の花形として広く親しまれており当支部では公演のたび毎に歌者と担当曲の交替を原則とし最重点演目としております。なお前半の二曲は新人・幹部教師クラスの方々の出演であり、ここ数年の成果を歌っていただきます。第一部のハイライトとして独唱の名曲である下出し仲風節、下出し述懐節を師範クラスの方々がお贈り致しますのでごゆっくりとご鑑賞ください。

第二部は本日公演のために「野村流古典音楽保存会本部」の師範・教師の先生方が賛助出演され、総勢で斉唱して下さいます。又特別出演として本部三役の師範の先生が出演されます。

プログラムの内容には、バラエティにとんだ踊りや独唱・斉唱を盛り込みました。その中の組踊手水の縁(忍びの場)の演目は独唱曲の代表曲目である仲風節、述懐節であります。組踊りのセリフと歌の組み合わせはきわめてむずかしく、そのセリフの終るフタカナ目で歌をうたい出す「二仮名がけ」と云います。歌・語り・舞の総合芸術といわれる組踊りの一端を思いえがきながら、ご静聴のほどをお願い申し上げます。

プログラムの最後は女性全員による古典斉唱でしめさせていただきます。独唱を間に挟み、在京琉舞界でご活躍中の舞踊家の先生方による古典舞踊・雑踊りなど用意してございます。

最後に本公演の開催にあたってご挨拶をいただいた皆様方に厚くお礼申し上げたいと思います。特に祝辞をいただいた東京沖縄県人会長仲田清祐様、野村流古典音楽保存会会長知花清秀様、沖縄芸能協会会長玉城政文様、琉球箏曲保存会会長上地尚子様、賛助出演の琉球舞踊家の諸先生方、笛・太鼓・胡弓の諸先生方・組踊研究家城間朝昌様、司会の崎山律子様、舞台監督土屋隆治様、スタッフSSCの皆様には心から御礼申し上げます。私共はこれからも琉球古典音楽の保存・継承・発展のために研鑽しその技術の向上に努力をして参りたいと思います。なにとぞ最後までご鑑賞の上、今後とも暖かいご支援とご鞭撻をたまわりますよう心からお願い申し上げます。

平成16年1月11日

ご挨拶

野村流古典音楽保存会
会長　知花 清秀

野村流古典音楽保存会関東支部二十五周年の節目を迎え、ここに記念式典と記念公演を開催するにあたりまして、当会を代表してお祝いのごあいさつを申し上げます。

支部結成当初わずか20名余でのスタートで、いろいろご苦労も多かったことと思います。今日では地域との芸能交流やボランティア活動等、幅広い活躍をするにいたっています。日頃の活躍に拍手を送りたいと思います。

又、沖縄タイムス社の芸術選賞にも多くの入賞者を輩出しています。新人賞が30余名、優秀賞に10余名、最高賞に5名が入賞するという目覚しい成果に対し心からご指導の師匠の方々に感謝致します。

2003年には沖縄県に芸能関係者で3人目の「人間国宝」が誕生し、いまや隆盛を極めた沖縄の芸術文化は、県内は勿論、本土や海外でも高く評価されている証左だと言えます。又愛好者が沢山いらっしゃることも嬉しいかぎりであります。

さて、当会と致しましては「和」を基本理念として、野村流の正しい保存と、それを受け継ぐ世代の育成に努力している所ですが支部と本部が活動の場所はそれぞれ離れていますが手を携えて郷土のすばらしい三線文化を守っていきましょう。又、近年は、他の府県の方々も沖縄の三線愛好者が多数居られます。心強く感ずるとともに私たちの責任の重さを痛感致します。

今年は、沖縄に「国立劇場おきなわ」が開場します。1月23日から3月19日まで開場記念公演で沖縄芸能の精髄である組踊を始め全ての芸能が演じられます。関東支部の皆様方も是非機会を作ってご覧下さい。　終りに、支部結成以来今日までご苦労された歴代支部長や役員及び関係者の皆様方に対しまして心からその労をねぎらうとともに感謝の意を表します。

どうぞこの二十五周年の節目を契機に会員各位が「和」のもとに更なる団結を強固なものにし、関東支部の限りないご発展と各位のますますのご精進をお祈りいたしましてごあいさつといたします。

平成16年1月11日

祝　辞

東京沖縄県人会
会長　仲田 清裕

「野村流古典音楽保存会関東支部創立25周年記念・第5回琉球古典音楽の会」が、練馬文化センターにおいて盛大に開催されますこと心からお慶び申し上げます。

昭和53年3月12日、関東支部が結成されて以来25年、幾多の御苦労を重ねながら、数々の沖縄関係の行事、大会、地域活動を通して、ふるさと沖縄伝統文化の発展、継承に多大な貢献をされておりますこと、謹んで感謝と敬意を表します。

とくに昨年11月の東京沖縄県人会主催の「本土復帰30周年記念チャリティー芸能公演」には、久田友昭会長をはじめ役員、会員の皆様のご理解をいただき、関東支部40名余の会員の皆様にご出演賜り、かぎやで風節、ごえん節、辺野喜節を格調高くご披露され2000名余の観客に古典音楽のすばらしさを実感させることが出来ました。誠に有難うございました。

本日は本部沖縄から、知花清秀会長はじめ師範、教師の先生方が総出演の斉唱、大いに期待しております。

さて、琉球王朝時代、沖縄の先人達は日本や中国、朝鮮をはじめ、東南アジアの国々との対外貿易により繁栄し、琉球音楽も共に発展して参りました。

中国から琉球王の支配を認める使節「冊封使」を５カ月から8カ月の間、琉球に滞在し歓迎の宴を何度も催し、1609年薩摩の支配をうけると冊封を受けたことを江戸の将軍に報告する謝恩使、江戸の将軍が代替わりするたび慶賀使を江戸に派遣し、中国の音楽を演奏し踊る儀式、座楽が演じられました。

このように沖縄の古典音楽は様々な時代背景の中で政治との関連で質を高め、洗練されました。
とくに尚敬王時代、三味線主取、踊奉行を置き、1719年国劇、組踊創始者玉城朝薫が、組踊に歌三線を入れたことにより、古典音楽の魅力を更に深めました。

今や組踊りは「沖縄オペラ」と評され、紅型衣装の踊りと歌三味線は、日本を代表する沖縄伝統芸能として、世界の桧舞台でも高い評価を受けております。
尚、沖縄伝統芸能の殿堂「国立劇場おきなわ」で1月23日から3月19日まで開場公演が行われます。組踊初上演から285年です。

琉球王朝時代、三線は高貴な楽器で上流階層の家宝として扱われ、沖縄の庶民が三線を弾くようになったのは明治以降のことでまたたく間に広がりました。

三線は中国福建省から移住した「久米36姓」が伝えたと言われ、三線の始祖赤犬子、琉球音楽の基礎を築いた湛水親方幸地賢忠、中国式「工六四」を基に「エエ四」琉球音楽の楽譜を作った屋嘉比朝寄から知念績高、野村安趙のエエ四、更に伊差川世瑞、世禮国雄の声楽譜附野村流エエ四と受けつがれ、野村流古典音楽保存会の今日の隆盛をみるに至っております。

本日、関東支部発展にご功績のあった仲宗根善久先生、仲宗根忠栄先生、照屋芳子先生と宮城秀夫先生に支部から感謝状が贈られました。今後ともご健康に留意され、関東支部の発展に貢献されますよう念願いたします。

終わりに、本公演のご盛会と野村流古典音楽保存会並びに賛助出演されます皆様方のご健勝、ご活躍を心から祈念申し上げます。

平成16年1月11日

祝　辞

沖縄芸能協会
会長　玉城 政文

野村流古典音楽保存会関東支部が創立二十五周年を迎え「第五回琉球古典音楽の会」を催されるにあたり、心から慶祝の意を申し上げ本部からの賛助出演者と共に本公演の盛会を期し上京を楽しみにしております。

懐かしく関東支部創立以前の頃を思いだし本紙面を借り少し触れて見たくなりました。当保存会の上原磯子師範が東京に移り住む事になった昭和43年、児玉清子先生との触れ合いが出来、児玉先生のお勧めにより道場も提供され、古典音楽指導を始めたのが保存会の始まりなのです。県出身で教職を終えられた数名の長老を中心に磯子先生を師に学び始めて４年が過ぎた頃、支部設立の話しが浮上した。ところが安富祖本部会長と支部結成準備完了間近かに指導者上原先生の帰郷止むなき事情が発生する。折角準備した支部設立の気運も消沈の縁に立たされたとき、救世主仲宗根善久氏が台頭したのである。勉学の為に上京したＮ氏は師匠である安富祖氏の要請には抗し切れず、沖縄の家族には内緒の形で引き受ける事になり指導を開始した。

初代支部長には音楽門外漢の金城芳子女子を強引に推して発足となりました。その後もＮ氏のご都合などで再び指導者捜しに奔走したがとかく、難産の支部であったことが今となっては懐かしい。然し乍らそのような苦境の中で歴代支部長並びに支部役員そして会員各位の弛まぬご努力に依って現在の勢力ある支部に発展されているおすがたには深く敬意を表するものであります。

沖縄芸能協会の諸行事にも皆々様は遠隔の地から並々ならぬご協力を下さり深く感謝の意を捧げ祝辞といたします。

平成16年1月11日

祝　辞

琉球箏曲保存会
会長　上地 尚子

あけましておめでとうございます。

新玉の年を迎えて野村流古典音楽保存会関東支部創立二十五周年記念公演第五回「琉球古典音楽の会」が開催されますことを心からお喜び申し上げます。

沖縄の伝統芸能は私達の祖先がつくりあげて来た世界に誇りうるすばらしい文化遺産です。 近年国からも高く評価され国の重要無形文化財にも指定され琉球古典音楽界から人間国宝として２人の先生が認定され、私達に誇りと自信を与えて下さいました。 これからは古典芸能を正しく受け継ぎ更に次の世代に継承発展させていくことは私達に課せられたつとめではないでしょうか。

古里を遠く離れた関東ではお稽古へ通うにも遠距離の為、継続することも大変な忍耐を要するし、お稽古するにも密集した生活環境では練習場の確保も困難で厳しい状況だとお聞きしまして、沖縄ではとても考えられない程なみなみならぬ努力で頑張っていらっしゃる皆様に頭が下がります。

久田友昭野村流古典音楽保存会関東支部長をはじめ歴代支部長であられた方々の一方ならぬご尽力のお陰で今日を盛大にお迎えすることが出来ました事をほんとうに有難く思います。

私達琉球箏曲保存会の関東地区の照屋芳子先生や北村澄子先生方が中心となって三線の先生方と一緒に研修会を行い、親睦を深め琉球箏曲の愛好者が一人でも多く増えることを願っております。さらに琉球箏曲保存会関東支部が一日も早く誕生できますよう願ってやみません。

本日の公演は独唱と舞踊が盛り沢山企画されており大変楽しみにしております。
終りに関東支部の限りないご発展と本公演の御盛会とさらに皆様の御健勝を祈念申し上げお祝いのことばといたします。

平成十六年一月十一日

斉唱　1

● かぎやで風

けふのほこらしやや　なをにきやなたてる
つぼてをるはなの　つゆきやたごと

解　説

今日の喜びを何にたとえることができましょう。まるで蕾の花が朝露を受けてぱっと花開くような心もちです。

● 恩納節

恩納松下に禁止の牌のたちゆす
恋忍ぶ辺の禁止やないさめ

解　説

恩納村の松並木の下に禁止の立て札があるが恋愛することまで禁止した立て札ではないだろう。

● 辺野喜節

伊集の木の花やあんきよらさ咲きゆい
わぬも伊集やとて真白咲きかな

解　説

伊集の花は真白な色で美しく清らかに咲いている。私もあの伊集の木の花のように美しくありたいものだ。

踊る人

真踊流安次富紀子琉舞道場
我那覇満子・大嶺次子

歌三線

久田友昭　仲宗根忠栄　宮城秀夫　大城眞吉　水谷亮介　佐々木隆史　神谷清輝　野村香司　川尻明　野原栄治　松田忠男
渡辺エミ　嶋崎香理　大城朝夫　森山朝貞　屋良　修　森　裕子　伊藤孝三郎　城間康信　陸　明美　知念房子　城間光子
寺本さやか　荒井つや子　笠原　稍　松岡倫広　板良敷朝英　新城　聡　小西睦子　冨着良彦　上地夕子　北原巌男　中村健次
橋川　準　濱田武志　上江州廣吉　平良芳江　出盛幸男　渡辺　幸　大野まり子　謝花茂幸　片倉美佐子　伊藤成樹　仲間　功
進藤ひとみ　笠原悠紀　古谷浩一　金沢一成　冨原恵子　浅香節子　粟津茂登美　屋比久有紀　小西雅子　土井正幸

筝

照屋芳子　北村澄子　川崎育恵　神谷ケイ子　土屋富美
歴　芳子　大城朝子　玉城幸子　森田潤子　花城スミ子

笛

仲田治巳

太鼓

石嶺　哲

胡弓

又吉信也

独唱　2

● 伊野波節

伊野波の石くびり無蔵連れて登る
にやへも石くびりとさはあらな

解　説

たった一人で、石混じりの坂道を登って行くのは大変辛いものであるが、愛する彼女と連れだって、互いに語り合いながら行くときはもっと、もっと、遠くあって欲しいと思う。

歌三線

寺本さやか・屋比久有紀・大野まり子

筝

土屋富美

琉球舞踊 3

● 四つ竹

打ち鳴らし鳴らし　四つ竹は鳴らち
今日や御座御座出でて　遊ぶ嬉りさ
（踊りくわでさ節）

解　説

踊りくわでさ節－快く四つ竹を打ち鳴らしながら、今日こうして晴れのお座敷に出て、音楽に合わせて踊ることは本当に嬉しいことです。

踊る人

八曄流餘音の会琉舞練場東京支部
志多伯順子・古我知代子・浜口佐代子・福止律子
大澤智枝美・大城喜勢子・稲場民枝・坂田苗子・池田ルリ子

歌三線
大城貞吉・松田忠男
板良敷朝英・新城 聡

箏　花城スミ子
笛　仲田治巳
太鼓　石嶺　哲
胡弓　又吉信也

琉球舞踊 4

■ 前の浜

エ开エ开前の浜に前の浜に散り飛びゆる
サー浜千鳥　エ开サー友呼ぶ声は
ちりちりやちりちりや
エ开エ开渡地の渡し舟漕ぐ舟の
　サー櫓の音かエ开サーからりころり
　漕げば行ぎゃい来きゃい
（前の浜節）

踊る人

宮城洋子琉球舞踊研究所
宮城洋子

歌三線
宮城秀夫・佐々木隆史
伊藤成樹・冨着良彦

箏　川崎育恵
笛　仲田治巳
太鼓　石嶺　哲
胡弓　又吉信也

歌　詞

エ开エ开今日の座敷は祝いの座敷
　亀が歌えばナー鶴は舞ふる鶴は舞ふる
エ开エ开上り下りの坂原越えて
　元の都にナーはや帰るはや帰る
　元の都にナーはや帰る

（坂原口説）

嘉例吉の遊び打ち晴れてからや
　エイスリスリ
　夜の明けて太陽の上るまでも
アスリ足拍子手拍子打ち囃子踊り
跳ね遊ぶ嬉しゃ
夜の明けて太陽や上がらはもゆたしゃ
　エイスリスリ
　己午後までや御祝しゃべら
　アスリ足拍子手拍子打ち囃子踊り
　跳ね遊ぶ嬉しゃ

（与那原節）

解　説

前の浜節

前の浜で、連れて飛んでいる浜千鳥の仲間を呼ぶ声がチリチリチリと聞こえてくるよ。
渡地の渡し舟の漕ぐ櫓の音は、からりころりと軽やかで、向こう岸へ行ったりこちらに着いたりで。
前の浜に、真白な雪が降るのかと思ったら、雪でなく、雪のような真白い米が積まれているのだ。

坂原口説

今日の座敷はお祝いの座敷であり、長寿の印である亀が歌えば鶴が舞うすばらしい座敷です。
上り下りの坂や野を越えて、やっと元の都にはれて帰って来たよ。

与那原節

おめでたい遊びが、たけなわになった上は、もう夜が明けて太陽の上がるまでも踊り続けましょう。
それそれ、足拍子、手拍子を打ち囃せ、踊り跳ねて遊ぶ嬉しさは。
たとえ夜が明けて、太陽が上がってもよいではないか。お昼頃まではお祝いを続けましょう。

（囃し前に同じ）

独唱 5

● 干瀬節

里とめばのよで云うめお宿
冬の夜のよすが互いに語やべら

歌三線▼　渡辺エミ
箏▼　土屋富美

解　説

愛する貴方であればどうしてお宿をお断りいたしましょうか、どうぞお入り下さい冬の夜長をよもすがら互いに語り明かしましょう。

● 子持節

たるよ恨みとて鳴きゆが浜千鳥
あはぬつれなさや吾身もともに

歌三線▼　森　裕子
箏▼　川崎育恵

解　説

そんなに悲しそうな声を出して鳴いている浜千鳥よ、いったい誰を恨んで鳴いているのか、私も愛するものを失ってこの世ではもう会えなくなった。今の私の心境と同じである。

琉球舞踊 6

● 揚作田

二葉から出でて　幾年が経たら
巌を抱き松の　もたえちゅらさ

（揚作田節）

蘭の匂い心　朝夕思いとまれ
ヨーシタリヌヨーンゾ

何時までも人の
ヨーハリ

飽かぬ如に何時までも人の
ヨーハリ

飽かぬ如に　（伊集早作田節）

解　説

芽を出した二葉の頃から、もう何年になったのでしょうか。がっしりと岩を抱いて生えている松の枝ぶりの見事さよ。
いつも馥郁たる香ただよわす蘭の花のように朝夕心掛けてください。
いつまでも人に飽きられないように思い心に留めなさい。
祝儀舞踊としてなかなか調法な踊りです。

宜保栄治郎著
琉球舞踊入門より

歌三線▼ 仲宗根忠栄・水谷亮介 野村香司

箏▼ 神谷ケイ子　笛▼ 仲田治巳　胡弓▼ 又吉信也　太鼓▼ 石嶺　哲

独唱 7

● 散山節

誠かや実か我肝ほれぼれと
寝覚めおどろきの夢の心地

歌三線▼ 水谷亮介　箏▼ 北村澄子

解　説

この不幸な突発事は真実本当の事なのか。私はぼうぜんとし、寝覚めの夢のようで信じられない。

● 仲風節

誠ひとつの浮世さめ
のよでい言葉のあはぬおきゅが

歌三線▼ 神谷清輝　箏▼ 神谷ケイ子

解　説

この世で人にとって最も大切なものは誠の心である。誠心誠意の言葉がどうして相手に通じぬことがあろうか、必ず通ずる。

● 述懐節

拝でなつかしや先せめてやすが
別て面影のたたばきゃすが

歌三線▼ 大城貞吉　箏▼ 照屋芳子

解　説

お会いできて嬉しさのあまり涙がこぼれるのは仕方ないが、お別れして後に面影がたってせつなくなったらどうしよう。

琉球舞踊　8

■　かせかけ

七読と二十読み　総掛けて置きゆて
里が蜻蛉羽　御衣よすらね
（干瀬節）

解　説

十七読み、二十読みの細かい総をかけ、あなたのためにとんぼの羽のように薄くて上質な布を織って差し上げましょう。

枠ぬ糸総に　繰り返し返し
掛けて面影の　勝て立ちゆさ
総掛けて伽や　ならぬものさらめ
繰り返し返し　思ど増る
（七尺節）

解　説

糸巻きの枠に糸を、繰り返し繰り返し巻いていくにつれ、あなたの面影が重なっていくのです。総をかけて糸つくりの作業をすることで、思いをまぎらそうするのですが、繰り返すごとにあなたへの思いが増すばかりです。

東京・沖縄芸能保存会
児玉 洋子
児玉とみ子・児玉百合子・児玉恵美子・児玉光子・児玉せつ子
児玉紀子・児玉由紀子・児玉栄子・児玉美和子・児玉初子

総もかけみちて　てきやよう立ち戻ら
里や我が宿に　待ちゆらだいもの
（さあさあ節）

解　説

上流家庭の娘が愛人のために真心をこめて、トンボの羽のような美しい上を織ってあげたいという、娘心の切々と喜びを表現し舞踊化したもの古典舞踊女踊りの代表的なものので一つになっています。

歌三線▼
久田友昭
屋良　修
野村香司

北村澄子

仲田治巳

又吉信也

独唱　9

● 二揚下出し　**仲風節**

結ばらぬ片糸の
逢はぬ恨みとてつもる月日

歌三線▼　仲宗根忠栄
箏▼　神谷ケイ子

解　説

結ばれない片糸のように、二人は会うこともできないのを恨みながら、ただただ月日がつもっていくのが、やるせなくいら立たしい。

● 二揚下出し　**述懐節**

いな昔なるいあはれ語らたる
馴れしい言葉のくたぬうちに

歌三線▼　宮城秀夫
箏▼　川崎育恵

解　説

そんなに昔のことになってしまったか。思いどおりにならないことを、なげき合った言葉は朽ちもせず、つい昨日のことのようだが、年月のたつのは早いものだ。

斉唱　10

● 稲まづん節

今年毛作りや　あん美らさゆかて
倉に積み余ち　真積みしやべら

解　説

今年の作物は大豊作なので、倉に収納できず野積みすることになるでしょう。

● 早作田節

銀臼なかへ　黄金軸立てて
試めし摺り増する　雪の真米

解　説

銀の臼に黄金の軸を立てて、試しに摺ってみると歩留まりがよく、雪のような真っ白な立派な米です。

歌三線▼ 野村流古典音楽保存会本部 師範・教師の先生方
箏▼ 琉球箏曲保存会本部 師範・教師の先生方
笛▼ 仲田治巳
太鼓▼ 石嶺　哲
胡弓▼ 又吉信也

独唱　11

■ 組踊 手水の縁（忍びの場より）

● 二揚 仲風節

暮らさらぬ　忍できやる
御門に出でみしよれ　思いかたら

歌三線▼ 久田友昭
箏▼ 北村澄子

● 二揚 述懐節

結で置く契り　この世までと思な
変わるなやよう　互いにあの世迄も

歌三線▼ 仲宗根善久
箏▼ 川崎育恵

唱元▼ 城間 朝昌（組踊研究家）
笛▼ 仲田治巳

手水の縁について

この組踊は、平敷屋朝敏の作品で、「哀しくも」また「美しい」恋物語で、作者朝敏の純粋な魂の願望を結実させた組踊といえるもので、上演回数も多く、その物語性と聞かせどころの音楽とが素晴らしく、多くの組踊ファンがいらっしゃいます。

この作品は、三つの段から構成され、第一段は、花見に出かけた山戸が、波平川で髪を洗っている玉津に出会い、手水を求め、いったんは断った玉津ですがやがて、手に水を汲んで山戸に飲ませることから二人は恋に落ちる場。第二段は、「忍びの場」で山戸は、恋しい玉津のところへ笠に顔を隠して忍んで行きますが、門番に見つかってしまいます。今日の独唱は、この場の「仲風節」と「述懐節」を聞いていただきます。この段は音曲が素晴らしく、よく忍びの場として、抜粋して舞台に登場しています。第三段目は、親の許さぬ恋故に、玉津はお手打ちになるところに、処刑の噂を耳にして、処刑場に駆けつけた山戸の命ごいに心動かされて家来は、二人を逃がしてやります。ハッピーエンドとなります。この筋立ては皆様もよくご存知のことと思います。組踊「手水の縁」には二揚五曲の名曲をはじめ全部で十四曲も使用され、古典の音律が魂のメッセージとしての役割を持っていることを実感なさると思います。

解説　国指定無形文化財（組踊）保持者
知花 清秀

構成・指導　知花 清秀
国指定無形文化財組踊保持者

琉球舞踊　12

❑高平良万歳

一　親の仇を討たん手てゃり
　　万才姿に打ちゃつれ
　　棒と杖とに太刀仕込んで
二　編笠深く顔かくち
　　忍び忍びに立ち出でて
　　村々里々越え来れば
三　平良や忍ぶ敵の門
　　兄弟尻目に見過して
　　後の道に巡り来て
四　行く末吉の御神に
　　祈る心は我が敵に
　　急ぎ引合はて賜れてやり
五　登て社壇に願立てて
　　真南に向ひて眺むれば
　　四方の景色の面白や
六　慶伊と慶良間の渡中には
　　海土の釣船浮きつれて
　　沖のかもめと見まがふや
　　それから下り下り来てヤエイ
　　御寺御門に立ち寄やり
　　休む姿や他所知らぬ

（逆行口説）

万才かふすややんざいかふすや
二月御穂立て穂祭りや
天より下りの何の日取りや
よい日取り来や重さり石や軽さり
天より下りの布織上手の綾織男の
錦の金襴唐苧の金襴
男の長者の荷馬の長者の
荷負ひよはれてやんざよはれて
やんざやんざと馬て道乗れば
一段とほめられた
今日も明日も御祝事よ

（萬歳かふす節）

隣の耳切れ鼻切れ●引き猫が
日はげ首白鼠に
荒頸喰われてあべらじをらばじ
飛のかじ思う人や
里一人だうヤエイ里が物云い
ぐらしゃな何にたてるがやぇ
ふだのぐゃげなや

（おほよしゃり節）

京の小太郎が作たんばい
尻ぼけ破れ手籠
尻すげて板片目貫ち
乗り来たるみいははと
しいつゃうんつゃうん
やんざいかうすや馬舞者
がいじ舞うた獅子舞うた
かにある物御目
掛けためをかしゃばかり
シタリガツヤウンツゃウン
ヤーツゃウンツゃウン

（さいんそる節）

解　説

「万才口説」「万才かふす」「おほんしゃり節」「さいんする節」の四曲で構成された万才踊りで、単に「万才」とも呼ばれる。琉球の国劇とされる組踊り「万才敵打ち」の中から兄謝名の子と弟慶雲の舞踊として独立させた二才踊り。踊りの主題となるのが「万才口説」で、親の仇を討とうと万才姿に身をやつし、編笠を深く被り、敵を求めて旅に出た兄弟が末吉宮に参拝し、そこから眺めた景色の素晴らしさに目をやり、改めて二人の秘めた決意を確認する内容となっている。緊張の中での道行きの場面である。二曲目の「万才かふす」では旅芸人の京太郎になりすまし、獅子頭、馬頭を持ち、敵の面前で踊る設定。「おほんしゃり節」では猫や鼠のまねなどして空手風に踊り、最後の「さいんする節」では逃げ惑う敵、高平御鎖を追い回し、見事目的を果たして帰っていく場面で、全体を通して大変劇的な構成となっている。各所に見所があるが、特に「おほんしゃり節」の「隣の耳切れ」の所で観客に背を向け奥に歩きながら、左右の足を交互にあげる「二段がまく（腰）」の所作は特に高度な技術が要求されるもので、重要な部分である。元来は二人踊りだが、近年は一人舞いも多い。

大城貞吉・松田忠男
板良敷朝英・新城 聡

神谷ケイ子

仲田治巳

又吉信也

石嶺　哲

独唱　13

● 仲村渠節

中村渠すばいどまますだれはさげて
あにあらはもとまば忍でいもうれ

歌 三線▼　知花清秀
箏▼　吉田登美子

解　説

「すべいど」に簾をさげてあるが、其処は私の寝床になっているから他所目にかからぬように忍んでおいでなさい。
「すべいど」(夜中小用のために出入りする戸)または(裏座敷)の意。

● 本花風節

三重城にぬぶて打ちまねく扇子の
またもめぐり来て結ぶ御縁

歌 三線▼　玉城政文
箏▼　上地尚子

解　説

三重城にのぼって出船を見送る扇子は、無事旅をされて戻られるよう祈ってうちまねいています。

● 赤田風節

赤田門やつまるとも
恋しみもの門やつまてくいるな

歌 三線▼　国吉正康
箏▼　城間安子

解　説

赤田門は閉まっていても両方の溝から自由に出入り出来るので差し支えはないが、みもの門は閉まってくれるな。

琉球舞踊　14

● マンノーマ

竹富ぬ親ぬ子ぬまんのーま
仲嵩ぬ主ぬ子ぬ里主

山ふくん抜りてい生りまんのーま
野ぬ抜きだ本々し栄いし

親ぬ子や親ん似どぅていゆまり
主ぬ子や主ん似どぅ名取たる
（入羽）親ならば節

親ならばヨーホ　竹富ぬ親なりおーリョー
ハイユマタ　竹富ぬ親なりおーリョー

主ならばヨーホ　仲嵩ぬ主なりおーリョー
ハイユマタ　仲嵩ぬ主なりおーリョー

解　説

竹富島に伝わるうたと踊りです。役人の子「マンノーマ」は親の子である
「福木のように大きく抜き出た人になってほしい。」とうたっています。
人頭税時代、人々は休むことなく働いていました。
マンノーマは村人に正月の3ケ日を休日として制定したのです。

踊る人　吉浜久枝八重山民俗舞踊七峰会 会主　吉浜久枝

歌 三線▼　宮城秀夫・冨着良彦
伊藤成樹・濱田武志

箏▼　川崎育恵
笛▼　仲田治巳
太鼓▼　石嶺　哲
胡弓▼　又吉信也

琉球舞踊　15

●花　風

三重城にぬぶて　手さじ持上げれば
早船の習や　一目ど見ゆる
（花風節）

朝夕さも御側　拝み馴れ染めて
里や旅せめて　いきやす待ちゆが
（下出し述懐節）

歌　意

愛しいひとを見送るために三重城の丘に登り、花染手巾をそっと振ったのですが、早船の常でしょうか。あの方を乗せた船はもうすでに走り去って遠く見えなくなってしまいました。

歌　意

朝に夕にお側にいて、深く馴れ親しんだあなたを旅立たせて、わたしはどんな思いでお待ちすればいいのでしょうか。

歌三線▼ 久田友昭・屋良　修
水谷亮介

▼ 北村澄子

▼ 仲田治巳

▼ 又吉信也

琉球舞踊　16

■　加那よー天川

一、カナヨー面影の立てばヨー
　カナヨー　宿に居らりらぬ
　ハルヨーンゾヨー
　カナヨー　シーシ
　できゃよ押し連れてヨー
　　カナヨー遊で忘ら
　ハルヨー　ンゾヨー
　カナヨー　シーシ

二、カナヨー貫木屋のあしゃげヨー
　カナヨー　手巾布立てて
　我が思る里にヨー
　カナヨーなさけ呉らな

三、カナヨーなさけ呉るばかりヨー
　カナヨー　手巾呉て何しゅが
　がまくくん締めるヨー
　カナヨー　めんさ呉らな
　ハルヨー　ンゾヨー
　　イメーヌカジハリヨーフニ

四、カナヨー遊で忘ららん
　うみまさて行きゅさヨー
　カナヨー　あれが情
　ハルヨー　ンゾヨー
　　ディアングワトウンケレ
（加那よ節）

解　説

愛しい人の面影が立つともう家にじっとしておれない。さぁ、連れ立って遊んであの人のことは忘れましょう。立派に建てられた離れの家で花染手巾を織ってあの人に愛の印として差し上げましょう。愛の印ならどうして手巾なのですか。どうせなら腰をしめているミンサー帯をあげましょう。あなたのことは遊んでも踊っても忘れることができません。思いはふくらむばかりです。

加那よー天川

天川の池やヨーアヌンゾヨー
　チカユティハナササナヤ
　シタリヨーンゾハヰヤイヤッサ
千尋も立ちゅら　　〃
おれよりも深く　　〃
思てたばぅれヨーアヌンゾヨー
　チカユテ　ハナササナカ
　シタリヨーンゾ　ハヰヤイヤッサ
　サッサイヤサヌサ

（天川節）

解　説

天川の池の深さは千尋もありますが、それよりもっと深く私を思ってください。

歌三線
仲宗根忠栄・水谷亮介
野村香司

筝
北村澄子

笛
仲田治巳

胡弓
又吉信也

太鼓
石嶺　哲

斉唱　17

●ゆしゃいなう節

十日ごしの夜雨　草葉うるはしゆす
御かけぼさへ　御世のしるしさらめ

歌三線

渡辺エミ　城間光子　片倉美佐子　上地夕子
寺本さやか　陸　明美　新藤ひとみ　渡辺　幸
屋比久有紀　荒井つや子　笠原悠紀　嶋崎香理
森　裕子　笠原　梢　冨原恵子
大野まり子　小西睦子　浅香節子
知念房子　平良芳江　小西雅子

筝

照屋芳子　土屋富美　玉城幸子
北村澄子　歴　芳子　森田潤子
川崎育恵　大城朝子　花城スミ子
神谷ケイ子

解　説

草葉「農作物」をうるおす十日ごしの雨が降って農民は豊年に随喜の涙を流している。これも、常に万民に恵みを垂れた給う、御主加那志前の御時世の賜で万代に栄える、しるしである。
豊穣を感謝し世代の有難さを言祝ぐ意味の歌で音楽会等では、最後の結び、即ち終曲として合奏して閉会するのが慣わしとなってます。

笛
仲田治巳

胡弓
大野まり子

太鼓
石嶺　哲

特別出演者の方々

師範 知花 清秀

野村流古典音楽保存会　会長
沖縄伝統音楽(野村流)保存会　副会長
沖縄芸能協会　副会長
野村流合同協議会　副会長
沖縄タイムス社芸術選賞新人部門選考委員

履歴・略歴

昭和35年	屋嘉宗勝　師に師事（琉球大学郷土芸能クラブ部員）	
昭和38年	奥間盛正　師に師事	
	沖縄タイムス社芸術祭	新人賞受賞
昭和42年	同	優秀賞受賞
昭和43年	同	最高賞受賞
昭和51年	野村流古典音楽保存会	師範免許
昭和57年	同　芸術選賞	奨励賞受賞
平成6年	同	大賞受賞
平成8年	県指定無形文化財 沖縄伝統舞踊（三線）保持者認定	
平成9年	国指定無形文化財 組踊（総合認定）保持者認定	
平成11年	県指定無形文化財 沖縄伝統音楽（野村流）保持者認定	

師範　国吉正康

履歴・略歴

昭和44年	沖縄タイムス芸術選賞　新人賞受賞
昭和47年	沖縄タイムス芸術選賞　優秀賞受賞
昭和48年	野村流古典音楽保存会　教師免許
昭和50年	沖縄タイムス芸術選賞　最高賞受賞
昭和58年	野村流古典音楽保存会　師範免許
平成 元 年	沖縄タイムス芸術選賞　グランプリ受賞
平成 7 年	沖縄タイムス芸術選賞　奨励賞受賞
平成10年	野村流古典音楽保存会　副会長

沖縄芸能協会

会長 玉城政文

履歴・略歴

野村流古典音楽保存会相談役
沖縄芸能協会会長
国指定重要無形文化財「組踊」保持者（理事）
県指定「沖縄伝統舞踊」保持者（副会長）
県指定「沖縄伝統音楽野村流」保持者

野村流古典音楽保存会関東支部創立25周年記念・第5回琉球古典音楽の会

師範　上地尚子

履歴・略歴

昭和44年	沖縄タイムス芸術選賞　最高賞受賞
昭和54年	琉球箏曲保存会　師範
昭和59年	沖縄タイムス芸術選賞　箏曲部門選考委員
平成3年	沖縄タイムス芸術選賞　（箏曲）大賞
平成8年	沖縄県指定無形文化財　沖縄伝統舞踊保持者として認定（地謡）
平成9年	沖縄県立芸術大学非常勤講師
平成11年	沖縄芸能協会　副会長 沖縄県指定無形文化財「沖縄伝統音楽箏曲」保持者
平成12年	琉球箏曲保存会　会長（八代目）
平成13年	国指定重要無形文化財　組踊保持者（地謡）
平成15年	沖縄伝統音楽箏曲保存会　副会長

師範　城間安子

履歴・略歴

琉球箏曲保存会師範
沖縄タイムス芸術選賞伝統芸能部門選考委員
沖縄タイムス芸術選賞大賞受賞
沖縄伝統音楽箏曲保持者
舞踊地謡保持者
琉球箏曲保存会副会長

師範　吉田登美子

履歴・略歴

昭和30年	宮城嗣周先生師事
昭和46年	教師免許取得
昭和51年	沖縄タイムス芸術選賞　最高賞受賞 箏曲研究所開設
昭和55年	師範免許取得
昭和57年	沖縄タイムス社芸術選賞　奨励賞受賞
昭和58年	沖縄タイムス社芸術選賞　選考委員
昭和59年	琉球箏曲保存会副会長（2期4年）
昭和63年	箏曲保存会南部支部設立　初代支部長 独演会（初夏の調べ）をもつ
平成3年	沖縄タイムス社芸術選賞　大賞受賞
平成11年	県指定無形文化財箏曲保持者認定
平成14年	県指定伝統舞踊地謡伝承認定
平成15年	沖縄タイムス主催宮城嗣幸顕彰公演出演
現在	琉球箏曲保存会幹事 琉球箏曲保持者理事

賛助出演

野村流古典音楽保存会本部
琉球箏曲保存会本部
真踊流　安次富紀子琉舞道場
真踊流　真竹会藤原悦子琉舞道場
玉城流　七扇会関東支部·関えり子琉球舞踊研究所
玉城流　煌扇会新城久美琉球舞踊道場
東京·沖縄芸能保存会
東京·沖縄芸能保存会
八曄流　前田千加子餘音の会琉舞練場東京支部
宮城洋子琉球舞踊研究所
吉浜久枝八重山民俗舞踊七峰会·会主

（五十音順）

後援

野村流古典音楽保存会
琉球箏曲保存会
沖縄タイムス社㈱東京支社
琉球新報㈱東京支社
沖縄ツーリスト㈱東京支店
東京沖縄県人会

役員兼実行委員

支部長	久田友昭
副支部長	佐々木隆史
	神谷清輝
幹事	野原栄治
	川尻明
	松田忠男
	土屋富美
会計	渡辺エミ
書記	北村澄子

主催·出演

野村流古典音楽保存会関東支部

スタッフ

SSS（ステージスタッフセンター）

総括	鈴木孝治
舞台監督	土屋隆治
照明	武村正子
音響	上村金治
司会	崎山律子
三味線調弦	比嘉善勝
	与儀正俊
	大湾朝重
箏調弦	上地尚子
	城間安子
	吉田登美子
写真撮影	吉田流槃

ビデオ撮影（映像編集）
SRC（エス·アール·シー）
志田隆一郎

チラシ·ポスター·プログラム制作
K's Factory（ケーズ·ファクトリー）
北村幸嗣
今田信也

事務局　北村澄子

野村流古典音楽保存会

顧問　大山一雄
顧問　仲本朝勇
顧問　玉栄昌治
顧問　安田慶善
相談役　城間徳太郎
相談役　上池源照
相談役　屋嘉比清
相談役　知花包喜
相談役　玉城政文
相談役　新里文英
相談役　花城康栄
相談役　譜久原朝敏
会長　知花清秀
副会長　国吉正康
副会長　富名腰義春

理事
〃　儀間常善
〃　大城喜邦
〃　金城タケ子
〃　小橋川善弘
〃　上原武彦
〃　照屋真一

評議員
〃　上間精光
〃　金城幸雄
〃　金良宗吉
〃　恩河忠哲
〃　岸本善吉
〃　喜瀬慎仁
〃　山内秀吉
〃　嘉数世勲
〃　安室孝雄
〃　糸数善昭
〃　崎浜秀光
〃　比嘉康春
〃　上原靖弘
〃　大城賢雄
〃　赤嶺ミヨ
〃　嘉味田光子
〃　高江洲昌弘
〃　松田邦昭
〃　宮城欣也
〃　古堅宗太郎
〃　島袋盛一
〃　仲宗根善久
〃　佐久本盛明
〃　仲栄真盛吉
〃　大城良仁
〃　又吉真也
〃　金城清一

監査役　古波蔵惟好
監査役　宮城赴
事務局　仲村春善
書記　田港朝弘
会計　譜久原朝次郎

平成16年1月11日開催